

高等学校運動部活動における指導者のフィードバック行動の影響に関する研究

スポーツビジネス研究領域

5017A000-9 岩本 岳

研究指導教員：作野 誠一 教授

【研究背景】

スポーツ庁は 2018 年に公表した運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン骨子の中で、「運動部活動は、学校教育の一環として行われ、我が国のスポーツ振興を支えてきた」という認識に立ち、「体力や技能の向上を図る以外に、異年齢との交流の中で、生徒同士や教師等との人間関係の構築を図ったり、自己肯定感を高めたりする等、教育的意義が大きい」と指摘している。このように、運動部活動の教育的意義が広く認められている一方で、運動部活動をめぐる問題が多数報告されているのも事実である。特に部活動による教員の長時間労働は今や社会問題となっている（読売新聞 2017 年 7 月 4 日、朝刊）。そういった部活動の在り方は、「ブラック部活動」（内田,2017）と揶揄され、各地の教育委員会が対応に追われるケースも少なくない（読売新聞,2018 年 2 月 1 日朝刊）。昨今のこのような運動部活動に関する報道は、教員の労働環境、拘束時間、金銭的報酬といった側面ばかりを取り上げている印象を受ける。しかしながら、本来部活動は教育課程外で生徒の自主的な活動の場であるため（学習指導要領,2013 年施行）、生徒の自主的な活動に向けた議論が進められるべきではないだろうか。指導者である教員は生徒の自主的な活動の場をつくるために適切な指導を行う必要があると考えられる。

しかし、中澤（2017）が自主性の曖昧さを指摘しているように、何を身につけて自主性が身についたと言えるのかといった議論は未だ行われていない。内田（2017）は、部活動に制度設計がないことを指摘しているが、学習指導要領にも明確な目標や学習内容は記載されていない。したがって、自主性についての理解を深め、その上でその自主性を育むために指導者である教員はどういった働きかけを行う必要があるのかという疑問が本研究の出発点である。

【先行研究】

運動部活動を対象とした自主性に関する研究では、多原・古田（2018）が行った中学生を対象とした研究において、部活動の目標として度々指摘される自主性と内発的動機づけが密接に関連していることを示唆している。内発的動機づけの規定要因に関する研究では、藤田・杉原（2007）及び手嶋（2008）の体育授業を対象とした研究で、授業の動機づけ雰囲気が生徒個人の内発的動機づけに影響を及ぼすことを明らかにしている。加えて、Smith et al.（2005）は指導者のフィードバック行動が生徒の動機づけ雰

囲気に与える影響を明らかにし、松井（2013）は、指導者のフィードバック行動が生徒の内発的動機づけに与える影響を明らかにしている。しかし、指導者のフィードバック行動が生徒の自主性に影響を及ぼすことを明らかにした研究や指導者のフィードバック行動、部活動の動機づけ雰囲気、生徒の内発的動機づけ及び自主的行動を同一のサンプルで検討した研究は見当たらない。

【研究目的】

本研究は、高校運動部活動における指導者のフィードバック行動測定尺度及び運動部活動における自主的行動測定尺度を作成し、高等学校運動部活動における指導者のフィードバック行動が生徒の心理的側面及び自主的行動に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。

【研究方法】

本研究では、まず予備調査として本調査において使用するフィードバック行動及び自主的行動という 2 概念の測定尺度の精査及び作成のため、運動部活動指導者へのインタビュー調査を実施する。その後、得られたデータを分析し、フィードバック行動測定尺度及び自主的行動測定尺度を作成する。その尺度に動機づけ雰囲気測定尺度、内発的動機づけ測定尺度を加えた調査票を作成した後に、A 大学ハンドボール部員の 1 年生 5 名に回答を依頼し、問題がないことを確認した後、高校の男子ハンドボール部員に対して、本調査を行う。

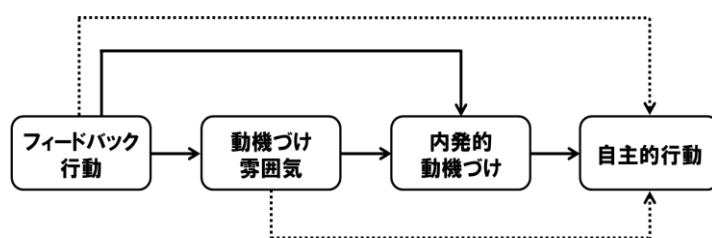


図 仮説モデル

【結果及び考察】

アンケート調査により 20 校から 440 部を回収した（回収率、84.1%）。

本研究では、まず得られたデータから指導者のフィードバック行動測定尺度及び生徒の自主的行動測定尺度の精査・作成を行った。その結果、先行研究（Amorose and Horn,2000）では「称賛」、「叱責」、「無視」の 3 因子から構成されていたフィードバック行動測定尺度については、「問いかけ」、「転換」因子を加えた 5 因子構造となった。また、先行研究で

は「無視」であった因子を本研究においては予備調査の結果から、言葉がけをしないことには生徒同士の会話を誘発させるねらいも含まれていることが明らかとなったため、「静観」と解釈した。自主的行動測定尺度については、「練習への取り組み」、「プランへの参画」、「チーム内コミュニケーション」の3因子構造であった。その結果を用いて、仮説モデルにおけるパスごとに回帰分析による検討を行った。

指導者による「問いかけ」は、体育・スポーツにおける動機づけに肯定的な影響を及ぼす（伊藤ら,2008）とされる課題関与的雰囲気には正の影響を与えることが明らかとなった。さらに、「問いかけ」は生徒の内発的動機づけを高め、自主的行動にも正の影響を与える結果となった。深見（2007）は体育授業を対象とする研究において、教員の発問といった教員と生徒の双方向的なフィードバックの表現のしかたである「双方向性」は子どもの知的探究心の活性化に影響力をもち、その結果、子どもの認識学習や自主的・協力的学習に重要な影響を及ぼす可能性を示唆している。本研究においてもこれを支持する結果となった。今後の運動部活動指導においては、指導者が生徒に意見を問いつけることや、生徒間での会話をうながすといった「問いかけ」を行うことが、これまでの「指導者主導」の部活動ではなく、「生徒主導」の部活動にシフトしていくために必要であろう。

「称賛」も「問いかけ」と同様、生徒の心理的側面及び自主的行動に正の影響を与えることが確認された。指導者が「称賛」することで、生徒は部活動の雰囲気を課題関与的雰囲気であると認識し、内発的動機づけが高まる。それにより、生徒の自主的行動も誘発される可能性が示唆される結果となった。これまでの先行研究（松井,2014）においても、指導者による「称賛」の影響については検討が行われてきたが、自主的な行動にも影響があることを明らかにしたことは本研究の新規性であると言えるだろう。

指導者による「静観」は、課題関与的雰囲気に対する負の影響、自我関与的雰囲気には正の影響を与えていることが確認され、生徒は指導者が意図して「何も言わない」ことを選択していると認識していない可能性が示唆された。この結果は、Smith（2005）の「プレーの良し悪しに関わらず、コーチが励ましのフィードバックをかけてやり、また、ミスに対して無視をすることがないと選手たちが思う時、彼らは課題関与的雰囲気を感じるのである」という結果と同様である。しかし、「静観」は自主的行動の「プランへの参画」に正の影響を与えていることが明らかとなり、「静観」することで生徒の自主的な行動が促進される可能性も示唆する結果となった。

「叱責」についても「静観」と同様に、生徒への

ネガティブな影響が多く確認された。指導者による「叱責」は、生徒に部活動の動機づけ雰囲気を自我関与的であると認識させ、生徒の内発的動機づけの低下にもつながる可能性が示唆された。生徒の内発的動機づけが低下することで、生徒が自主的に行動を生起することが困難になるといえよう。しかし、部活動が学校教育の一環であることから、指導者の「叱責」のすべてを否定することはできない。松井（2014）が、生徒からの信頼感の高い指導者であれば、「叱責」しても、内発的動機づけは低下しないどころか、高まることを明らかにしているように、生徒と指導者の関係性いかんで生徒の受け取り方は変わることも考えられる。したがって、「叱責」についても「静観」と同様に効果的に行うことが求められる。

「転換」は、失敗をした生徒に対して、気持ちを切り替えさせるような言葉かけを行うといった項目から構成され、結果として内発的動機づけを高めることが明らかとなった。また、「転換」は動機づけ雰囲気の「失敗に対する罰」に負の影響があることが確認された。この結果から、生徒が失敗を恐れることなく、何か新たな技術を習得するためには、「転換」のフィードバック行動が効果的であることが考えられる。また自主的行動の「プランへの参画」に対しても正の影響を与えており、生徒の失敗を「叱責」することなく、気持ちを切り替えさせる「転換」を行うことで、生徒の自主的行動の誘発まで影響を及ぼす可能性が示唆された。

【結論】

指導者による生徒への「問いかけ」及び「称賛」は、生徒の心理的な側面及び自主的な行動に対して、ポジティブな影響を及ぼすことが明らかとなった。指導者が生徒に「問いかけ」や「称賛」を行うことで、生徒の自主的行動を誘発させることが考えられ、生徒の自主的な活動の場を創造するために、有効なフィードバック行動といえるだろう。

また現在、教員免許更新制が採用されており、教員は10年に1度、講習の受講が義務づけられている。加えて、文部科学省は2017年に部活動の指導体制の充実を目的とした部活動指導員制度についての通達を行い、その通達の中で、部活動指導員に対し学校の設置者及び学校は、研修を実施し、部活動の意義や買う部の活動の目標や方針について理解させることと記載している。そういった、義務講習や研修の機会を活用し、部活動は生徒の自主的な活動の場であるといった部活動の目的を再確認することや、その目的に対しての指導者の適切な働きかけを周知することが指導現場で散見される問題の解決の一助となり得るだろう。その際、本研究で得られた知見の活用が期待できるものと考えられる。